

サロメ

TI

サロメは古代から頻繁に芸術家たちに取り上げられてきました。イエスの生涯において、洗礼者ヨハネの処刑は大きな意味を持つだけに、あらゆる芸術家が様々な形で表現してきた素材です。

(from [サロメ～絵画の中の女性たち | HolisticStyleBook \(h-stylebook.com\)](https://holisticstylebook.com/salome/))

洗礼者ヨハネとサロメ

サロメは、パレスチナに一世紀頃実在したとされる女性である。新約聖書の中に登場し、ヘロデ王の妻ヘロディアの娘との表記のある女性がサロメである。実は新約聖書の中にはサロメと名は一切記載がない。なぜサロメと呼ばれるのかといえ、古代イスラエルの著述家が著した『ユダヤ古代記』に、両親などの名が同じ人物が登場する。この女性の名がサロメといい、新約聖書内に登場するヘロディアの娘と同一人物と考えられたからである。

新約聖書の中のサロメは、義父であるヘロデ王に請われて宴会にて踊りを披露する。その踊りにいたく満足した王は、サロメに褒美になんでも好きなものを与えると約束する。母であるヘロデ王の妻ヘロディアに何がいいかを相談したサロメ。ヘロデ王と自分の結婚について批判した洗礼者ヨハネを憎んでいたヘロディアは、サロメに洗礼者ヨハネの首を願い出ようと吹き込む。サロメは母の指示どおり洗礼者ヨハネの首を所望する。不敬罪で投獄したとはいえ、洗礼者ヨハネに対して畏怖や尊敬の念を持っていたヘロデ王は、洗礼者ヨハネの処刑を渋る。しかし衆目の中でサロメになんでも好きなものを与えると約束したことを、王である自らが破るわけにはいかない。ついにヘロデ王は、洗礼者ヨハネの処刑を命ずる。洗礼者ヨハネの首は切り落とされてしまうのです。

オスカー・ワイルドのサロメ

サロメを語る際に忘れてはならないものがある。

それは 19 世紀末、オスカー・ワイルドによって発表された戯曲のサロメである。新約聖書中のサロメの出てくるシーンの全く新しい解釈である。

ワイルドのサロメはその姿を見ることを禁じられている、投獄された預言者ヨカナン(= 洗礼者ヨハネ)を盗み見て恋におちてしてしまう。しかし預言者ヨカナンは当然この愛を拒否する。愛を拒まれたサロメはいつか必ず預言者ヨカナンに口づけすると決意する。

ある宴席でヘロデ王は客の前でダンスを披露するようサロメに命ずるが、気乗りしないサロメ。だが褒美になんでもサロメの欲しいものを与えると約束され、サロメは 7 つのヴェ

ールの踊りを披露する。ヘロデ王の望み通り素晴らしい踊りを披露したサロメは、約束の褒美として預言者ヨカナンの首を所望する。預言者ヨカナンの力を恐れるヘロデ王は、なんとかして処刑を避けようとする。黄金や宝石、高価な香料などその他の物で気をそらそうとするヘロデ王であるが、サロメは決して譲らない。ついに約束通り預言者ヨカナンの首を切り落とし銀の皿に乗せてサロメに引き渡す。サロメは預言者ヨカナンの首に向けて愛を語り、そして愛おしそうに口づけをする。その恐ろしい姿を見たヘロデ王は、サロメをも殺してしまう。

破壊的でありながら抗い難い魔力のような魅力を持った妖艶な美女を思わせるサロメだ。当時、実際に上演された際には最後の生首に口づけするシーンがかなりのスキャンダルになったということだが無理もない。

新約聖書のサロメは自発的にではなく母ヘロデアの指示で洗礼者ヨハネの首を王に願い出るが、オスカー・ワイルドのサロメは自らの明確な意志で洗礼者ヨハネの首を所望している。この点が大きな違いである。

サロメを描いた作品

1. ティツィアーノ・ヴェチェッリオ『ヨハネと首を捧げるサロメ』

新約聖書に忠実に描かれているようだ。下げ渡された洗礼者ヨハネの首を捧げ持ち母の元へ運んでいるように思える。

高く掲げ持っているのは洗礼者ヨハネに対する畏怖の念の表れだろうか。洗礼者ヨハネの首を直視しないサロメの視線はこちらに向けられている。あくまでもこの悲劇は自分の意思ではない、そう言いたいのであろうか。しかしその視線にはわずかに妖艶なものが含まれているように感じられる。まるでこちらを惑わせるような視線だ。



2. ギュターヴ・モロー『出現』

モローはかなりサロメからインスピレーションを得たようで数多くサロメをモチーフにしたものを残している。その中でも特に有名なのは『出現』であろう。空中に現れた洗礼者ヨハネの首を指差すサロメ。美しく装ってはいるがほぼ半裸のような姿をしている。とても神秘的でいながら官能的だ。従来では銀盆に乗せられた洗礼者ヨハネの首という構図が多いが、この洗礼者ヨハネは空中に鮮血を滴らせながら浮いている。そして神々しく光り輝いている。サロメはそれを腰が引けるでもなくまっすぐに指差す。

オスカー・ワイルドのサロメが発表される数年前に披露されたこのモローによる独特の構図は、見るものに衝撃を与えた。この



モローの『出現』によって、サロメが妖艶なファム・ファタール（男性の運命を変え破滅させる女性）であることが多くの者に印象付けられたに違いない。そしておそらくオスカー・ワイルドも影響を受け、あの預言者ヨカナーンの首に口づけするサロメが生まれたのではないだろうか。

3. フランツ・フォン・シュトゥック『サロメ』

オスカー・ワイルドによるサロメの戯曲発表よりあとに描かれたこの絵画は、まるでその戯曲の中のサロメをそのまま具現化したようだ。

妖艶な雰囲気漂わせて胸をあらわに腰をくねらせ、誘惑しているようだ。サロメの顔は洗礼者ヨハネの首に向けられ、その紅で赤く彩られた口は開かれ、笑みを浮かべている。これから口づけする喜びに打ち震えているのであろうか。洗礼者ヨハネの首は威徳で光り輝いているが、サロメに全く畏れは見られない。これは純粹に愛ゆえなのか、拒否されたことからくる執着か、狂気か。それとも狂気を呼ぶほど愛してはいけない相手を楽しむすぎた悲哀か。

